

## 監訳者あとがき

本書は、C.H.ベック社のヨーロッパ史叢書全 10 冊の一冊である。本叢書は最新の研究成果に基づき、ヨーロッパ史を国民国家的視角ではなくヨーロッパ的視角で通観しようとするものである。第 1 巻ハルトムート・レッピン『古典期ギリシャ・ローマの遺産』、第 2 巻ルドルフ・シーファー『キリスト教化と諸王国の形成—ヨーロッパ 800~1200』、第 3 巻ベルント・シュナイデミュラー『境界経験と君主制秩序—ヨーロッパ 1200~1500』、第 4 巻ルイーゼ・ショルン=シュッテ『宗教戦争とヨーロッパの膨張—ヨーロッパ 1500~1648』、第 5 巻ゲットリト・ヴァルター『諸国家の競合と理性—1648~1789』、第 6 巻アンドレアス・ファールマイヤー『諸革命と諸改革—ヨーロッパ 1789~1850』、第 7 巻ヨハネス・パウルマン『グローバルな優越と進歩信仰—ヨーロッパ 1850~1914』、第 8 巻ルッツ・ラファエル『帝国主義の暴力と国民動員—ヨーロッパ 1914~1945』、第 9 巻ハルトムート・ケルブレ『冷戦と福祉国家—ヨーロッパ 1945~1989』、第 10 巻アンドレアス・ヴィルシング『民主主義とグローバル化—1989 年以降のヨーロッパ』からなっている。これらのタイトルが集約的に示しているように、第一次世界大戦勃発 100 周年記念を迎える時期に、また冷戦終結二十数年を経た地平で、ヨーロッパ史の総括を試みようとするものである。すなわち、世界大戦という国民国家的対立の負の遺産を克服し、「多様性のなかの統一」・自由と民主主義の基本理念のもと大小たくさんの国家・民族が幾多の困難を乗り越えて接近・融合・統合・拡大を実現してきたヨーロッパの今日の到達点から、ヨーロッパ史を総括的に展望しようとしている。

本書の著者ケルブレ教授はこの大きな潮流に掉さすスタンスから、ヨーロッパ共同体の歴史家の連絡組織「リエゾン・グループ」の中心的メンバーとして活躍してきた。ヨーロッパ統合の進展・深化と拡大という基本的方向性を見据えながら、それを可能にしてきた諸要因・諸条件を本書のなかで俯瞰している。いくつかの書評が出ているが、ドイツでもっとも「伝統と権威」のある学術雑誌 *Historische Zeitschrift* (『史学雑誌』) 第 294 巻(2012 年)所収の評価では、「国民国家的な視野を乗り越える 10 巻本のヨーロッパ史、その戦後 1945-1989 年を扱うのにケルブレよりすぐれた執筆者はほとんどいないであろう」と。また、ケルブレにとっては政治史も重要だが、むしろ、重点を社会、文化、経済の歴史においていると本書の特徴をポジティブに概括している。しかも、そうした総合的な把握に立って非植民地化過程でのヨーロッパのグローバルな位置づけを試み、その位置づけを比較史的にも分野ごとにも提供している点を特筆すべきものとして強調している。そして最後に、「無条件に読む価値があり、入門書としても」高く評価できると。

この入門書としても価値があり格好のものという評価を裏付けるのが、多くの一般読者を持つドイツ最大の新聞 *Frankfurter Allgemeine* (『フランクフルター・アルゲマイネ』) に書評が掲載された(2011 年 12 月 19 日)ことであろう。それによれば、もちろん論争になる点はあるであろうが、結論的には本書が単にヨーロッパの視野だけでなくグローバルな

諸関係のなかにヨーロッパを位置付けている点が特にすぐれているとしている。また、もう一つの「伝統と権威」のある専門学術雑誌 *Vierteljahresschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* (『社会経済史季報』) 第99巻第4号(2012年)掲載の書評も、「ヨーロッパの現在をよりよく理解する上で貢献している」と総括している。さらに、ドイツ学術交流会 (DAAD) の留学生同窓会誌 (*Das Letter. Alumni-Magazin des Deutschen Akademischen Austauschdienstes*) にも書評が掲載されている (2011年12月)。1945年にヨーロッパは前代未聞の権力喪失に陥ったが、それに続く東西ヨーロッパの歴史をベルリンの社会史家ケルブレは総括している。彼によれば、ヨーロッパ諸国のすべての社会が共通の「異常なゆたかさの時代」を享受したという。これは東西ヨーロッパの社会的相違の陰に隠れて「これまで認識されなかったこと」だと。超大国米ソはヨーロッパにおけるそれぞれの同盟者が経済的飛躍を経験することが陣営の強化につながることを認識し、その結果、西ヨーロッパでは社会の民主主義化と現代的福祉国家が実現され、東ヨーロッパの独裁体制諸国では工業化と社会国家の端緒が実現したと。以上のような各方面からの高い評価が果たしてどこまで妥当かは読者の判断にゆだねたい

ともあれ、本書を刊行直後に手に入れ、これは日本に紹介するに値すると考え、3人の若手研究者に声をかけたところ、それぞれ博士論文準備などで多忙を極めるなか、全員が参加を快諾された。序章、第1章、第2章、第3章を瀧川貴利 (TAKIKAWA Takatoshi)、第4章、第5章と謝辞、文献案内、索引を赤松廉史 (AKAMATSU Yasufumi)、第6章、第7章、第8章、第9章、終章を清水雅大 (SHIMIZU Masahiro) が分担し、監訳者が全文章にあたり検討を加え添削を施し、ケルブレ教授にも折に触れ質問し、正確と統一を期した。人名・国名など原語をどのようにカタカナ表記するか、ヨーロッパのように国境の変遷が著しく時代ごとに表記が変わるといったことから、どのカタカナ表記を採用するかは難しい問題を孕んでいる。原音主義を一応の基準としたが、慣用的に固定化したカタカナ表記に従ったことも多く、その意味では一貫していないが、邦訳に固有の問題として許容されるのではないかと考えている。頻出する組織・機関名でいえば、たとえば EU を「ヨーロッパ連合」とするのか「欧州連合」とするのか、いずれも翻訳書・研究書で使われている。文献案内にあるトニー・ジャットの邦訳はすべて「ヨーロッパ」で統一している。原音主義ならばヨーロッパとすべきであり、共訳者の訳語にはそれも頻出した。しかし本書では統一のために EU 日本代表部が採用している「欧州」の訳語を採用することとした。こうしたことも含め、不適切な表現や誤りなどがあれば、それはすべて監訳者の責任である。大小にかかわらず、ご指摘ご教示いただければ幸いである。

著者ケルブレ教授は、ベルリン・フンボルト大学を定年退職し名誉教授となった後も、シニアプロフェッサーとして現役で講義と演習を担当し、ベルリン自由大学比較史研究所の部長の一人として国際的シンポジウムなども共催し、その記録を編著として公刊している<sup>1</sup>。ヨーロッパ統合の深化と拡大の半世紀が世界的に発信している積極的なメッセージが

---

<sup>1</sup> 最近の国際シンポジウムは、「1950年代以降のヨーロッパ統合における社会」をテーマと

本書を通じてより広く正確に知られることとなり、近隣諸国との関係改善や北東アジアの平和的發展に資するところがあるとすれば、望外の喜びである。

ケルブレ著の邦訳はこれで三冊目となる。いずれも日本経済評論社にお世話になった。社長栗原哲也氏、編集部谷口京延氏、そして出版企画から刊行に至るまで全プロセスで労を惜しまれなかった編集担当の新井由紀子氏に深く感謝する。

---

し、移民、消費、社会政策、文化政策と相互認識の進展などを議論している。Arnd Bauerkämper/ Hartmut Kaelble(Hg.), *Gesellschaft in der europäischen Integration seit den 1950er Jahren. Migration-Konsum- Sozialpolitik- Repräsentationen*, Stuttgart 2012.